様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１３２７５

研究課題名（和文）安心と信頼が両立する階層的メカニズムの解明―地域社会群に対するマルチレベル分析―

研究課題名（英文）Multilevel Relationship between Assurance and Trust: Analysis on Community Survey Data

研究代表者
福島　慎太郎（FUKUSHIMA, Shintaro）

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：８０７１２３９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「安心」と「信頼」が両立する階層的なメカニズムを検討することを目的として行われた。研究を通して、次の知見が得られた。
１）内集団メンバーに対する「信頼」は、集団レベルで「規範」として作用することで、環境に対する「安心」と表裏一体に成立することが示唆された。２）内集団メンバーに対する「信頼」は個人レベルでは主観的幸福感を促進するが、集団レベルでは主観的幸福感を抑制することで、「安心」としてメンバーの調和を促していることが示唆された。３）集団レベルで人間関係の流動性の高い環境に置かれることで、内集団メンバーに対する「信頼」は他者一般に対する「信頼」の形成を促進することが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
先行研究では、集団内部の「安心」は他者一般に対する「信頼」の形成を抑制することが示唆されてきた。そのような中で、本研究は集団内部の「信頼」と「安心」は「規範」を介して集団レベルで表裏一体に成立し得る階層的な関係を持つことを示した。さらに、人々の流動性の高まりに伴い、集団内部の「信頼」は他者一般に対する「信頼」とも両立可能であることが示された。
社会のグローバル化および情報化に伴い人間関係の選択可能性が高まることが予想される中で、本研究の成果は「安心」と「信頼」を両立させること、すなわち集団内外の人々が調和・共生する社会の構築が可能であることを示唆するものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study is to examine the multilevel mechanism of the association between trust and assurance. The results of the study is as follows.
1) Community trust functioned as social norm, which induced community-level association between trust and assurance. 2) Individual-level community trust rose happiness while community-level community trust (i.e. assurance) suppressed happiness, which lead to interdependence of community members. 3) Individual-level residential mobility increased general trust, while community-level residential mobility strengthened the association between community trust and general trust.

研究分野：社会心理学

キーワード：信頼　安心　規範　内集団　外集団　マルチレベル分析　地域社会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

社会のグローバル化および情報化に伴い人間関係の選択可能性が高まる中で、集団内部のメンバーとの既存の協働関係と集団外部の他者一般との新たな協働関係を両立する可能性に対する関心が高まっている。

これら集団内部のメンバーおよび集団外部の他者一般との協働関係について、既存の国際比較研究では、集団内部の「安心」（他者が協力的/利他的に振る舞うことが期待される、社会的不な確実性の低い状況）は集団外部の他者一般に対する「信頼」（他者が協力的/利他的に振る舞う人物であるか否かに関する信念および期待）の形成を抑制する可能性を示唆してきた[1) 2)]。一方で、地域社会を単位とした国内研究からは、「安心」と「信頼」は互いに抑制し合わない、あるいは相乗的に形成され得ることが示唆されている[3) 4)]。しかし、これら国際比較研究と国内比較研究の結果に齟齬が生じる理由は明らかにされていなかった。

２．研究の目的

先行研究における分析単位に応じた結果の齟齬を解消するために、本研究は「安心」と「信頼」が両立する階層的なメカニズムを検討することを目的とした。

「信頼」は相手の協力的/利他的な人格に対する個人レベルの信念/期待である一方で、「安心」は個人を取り巻く環境における集団/社会レベルの社会的不確実性の低さを表す概念である。そこで、本研究は個人レベルおよび集団レベルのプロセスの相違に着目した上で、「安心」と「信頼」の間の階層的な関連を検討した。

３．研究の方法

研究の目的を遂行するために、地域コミュニティ（字・丁目単位の地域社会）群の全世帯を対象とした質問紙調査を行った。地域コミュニティ群をサンプリングの単位とすることで、個人レベルのプロセスと集団（地域コミュニティ）レベルのプロセスを弁別して捉えることが可能となる。質問紙は、日本郵便株式会社が提供する配達地域指定型郵送サービスであるタウンメールを利用して各世帯 1 部ずつ郵送で配布し、20 歳以上の任意の 1 人に回答をお願いした。質問紙の回収は、参加者の自由意思でポストに投函することをもって行った。

(1)調査対象

対象となる地域コミュニティ群は、住民の住居流動性（居住年数が 10 年未満の住民割合）に応じて、多段抽出法を用いて抽出した。抽出の 1 段目で住居流動性が相対的に大きい東京都、小さい秋田県、中程度の滋賀県を選定した上で、2 段目で各都県における住居流動性の高中低に応じた 3 市区町村（合計 9 市区町村）を選定した。そして 3 段目で、各市区町村の代表的な（住居流動性の中央値による）の地域コミュニティ群を選定した。質問紙の有効回答数は、96 の地域コミュニティに居住する 1,972 名であった。

(2)質問項目

内集団メンバーに対する「内集団信頼」と外集団の他者一般に対する「一般的信頼」を弁別して測定した。「内集団信頼」を測定するための項目として、「同じ町内/集落に住む人たちを信頼している」を含む 3 項目を設けるとともに、「一般的信頼」を測定するための項目として「初対面の人を信頼している」を含む 3 項目を設けた（いずれも 7 段階評定）。

他者の協力行動/利他行動に対する信念/期待としての「信頼」に加えて、協力行動/利他行動に関する「規範」を測定した。回答者本人の「個人規範」を「自分がお世話になった町内（集落）の人の頼みを断ってはいけないと思う」を含む 2 項目を用いて測定するとともに、メンバー全体で共有された集団規範を「この町内（集落）にはお互いの役に立つことを求める雰囲気がある」を含む 2 項目（いずれも 5 段階評定）を用いて測定した。

加えて、回答者本人の協力行動/利他行動を、集合活動 6 項目（e. g. 地域資源の保全）の参加数をもって測定するとともに、協力行動/利他行動に関する一連の項目群との関連が予想される回答者の主観的幸福感を「現在、あなたはどの程度幸せですか？」（11 段階）を用いて測定した。また、統制変数として、個人の基本属性 7 項目（e. g. 性別、年齢）を測定するとともに、集団の基本属性 4 項目（人口密度、農業者比率、漁業者比率、住居流動性）の国勢調査データを取得した。

(3)分析方法

調査データに対して、個人レベルおよび集団（地域コミュニティ）レベルの効果を弁別して検証することのできるマルチレベル分析を行った。その際、独立変数の値を集団平均を基準として中心化した上で、集団レベルの効果から個人レベルの効果を差し引くことで、個人を取り巻く集団環境の文脈効果を算出した。

４．研究成果

研究を通して、次の知見が得られた。

(1)「内集団信頼」は集団レベルで「集団規範」として作用することで「安心環境」となる

集団レベルの「内集団信頼」は、皆が他のメンバーの協力行動を期待し合っている状況であると言え、「集団規範（協力して当たり前、協力すべきという信念）」として作用する可能性がある。

そこで、「内集団信頼」を独立変数、「個人規範」および「集団規範」を媒介変数、「協力行動」(集合活動への参加)を従属変数、個人の基本属性および集団(コミュニティ)の基本属性を統制変数としたマルチレベル媒介分析を行った。

分析の結果、「内集団信頼」は、集団レベルで「集団規範」(「○○して当たり前」「○○すべき」という共有信念)として作用することで、個人を取り巻く「安心環境」となり、メンバーの協力行動を維持させていることが示唆された(図１参照)。

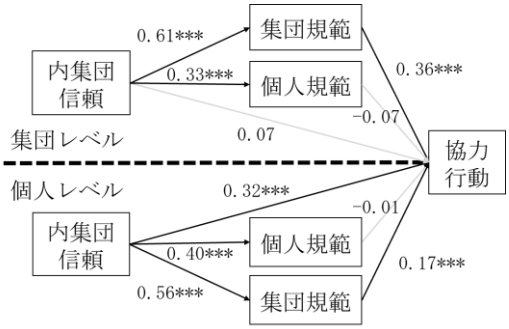

図１　マルチレベル媒介分析の結果

(2) 集団レベルの「内集団信頼」は個人の幸福感を抑制する

「集団規範」として作用する集団レベルの「内集団信頼」は、人々の主観的幸福感を低下させる可能性がある。皆が信頼し合っている(互いの協力行動を期待し合っている)状況は、「しがらみ」として個人の自由を制限し得るためである。

そこで、主観的幸福感を従属変数、「内集団信頼」を独立変数、基本属性項目を　統制変数としたマルチレベル分析を行った。分析の結果、「内集団信頼」は個人レベルでは主観的幸福感を促進するが、集団レベルでは主観的幸福感を抑制することが示された。そして、その傾向は人々の住居流動性が低い環境でより顕著であることが示された。

これらの結果から、流動性の低い安定した人間関係の下で、「内集団信頼」は個々人の主観的幸福感を抑制し、メンバー間の調和を図る「安心環境」として機能する可能性が示唆される。

(3)「安心」から「信頼」が醸成されるのは集団レベルで高流動な社会環境である

集団レベルで「安心環境」として成立する「内集団信頼」と他者一般に対する「一般的信頼」との関係は、人間関係の流動性(新しい関係を築く機会の多さ)に応じて異なることが予想される。先行研究から、1)個人レベルでは、関係の流動性が高い個人ほど、内集団メンバー同士の関係に依存する必要性が小さく、他者一般に対する「一般的信頼」が形成される可能性がある[5)]。それに対して、2）集団レベルで流動性が高い社会環境に置かれることで、「内集団信頼」の「集団規範」としての特性が弱まり、「安心」から「信頼」への形成が促進される可能性がある。

そこで、「一般的信頼」を従属変数、「内集団信頼」を独立変数、住居流動性(10 年以内に転居をした住民の割合)を調整変数としたマルチレベル分析を行った。

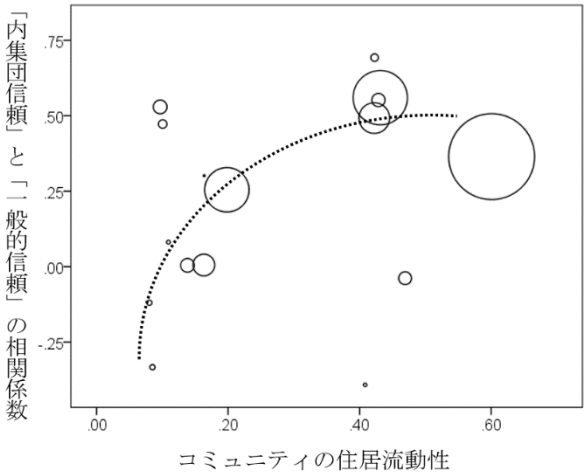

図２　住居流動性に応じた「安心」と「信頼」の関連

分析の結果、1）個人レベルで住居流動性が大きい人ほど「一般的信頼」は高かった(b=0.482, p<.001)。それと同時に、2)「内集団信頼」と「一般的信頼」との関連は、集団レベルの住居流動性が高い社会環境下に置かれることでより強くなっていた(b=0.446, p<.05；図２参照)。

以上の結果から、集団内部の「内集団信頼」と「安心」は「規範」を介して集団レベルで表裏一体に成立し得る階層的な関係を持つことが示された。さらに、人々の流動性の高まりに伴い、「内集団信頼」は「一般的信頼」とも両立可能であることが示された。

本研究の成果は、社会のグローバル化および情報化に伴い人間関係の選択可能性が高まることが予想される中で、「安心」と「信頼」を両立させること、すなわち集団内外の人々が調和・共生する社会の構築が可能であることを示唆するものである。

＜引用文献＞

1) Yamagishi, T. (1988). The provision of a sanctioning system in the United States and Japan. Social Psychology Quarterly, 265-271.
2) Yamagishi, T., & Yamagishi, M. (1994). Trust and commitment in the United States and Japan. Motivation and emotion, 18(2), 129-166.
3) 辻竜平・針原素子 (2002). 都市と村落の社会的ネットワークと一般的信頼.日本社会心理学会第 43 回大会発表論文集, 114-115.
4) 福島慎太郎, 吉川郷主, 西前出, & 小林愼太郎 (2011). 一般的信頼と地域内住民に対する信頼の相互関係の検証―京都府北部に位置する 3 自治体の全農業集落を対象としたマルチレベル分析―. 環境情報科学論文集, 25, 137-142.
5) 山岸俊男 (1998). 信頼の構造. 東京大学出版会.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Shintaro Fukushima, Yukiko Uchida, and Kosuke Takemura	４．巻 56
２．論文標題 Do you feel happy when other members look happy? Moderating effect of community‐level social capital on interconnection of happiness	５．発行年 2021年
３．雑誌名 International Journal of Psychology	６．最初と最後の頁 642～653
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/ijop.12744	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 FUKUSHIMA Shintaro、TAKEMURA Kosuke、UCHIDA Yukiko、ASANO Satoshi、OKUDA Noboru	４．巻 61
２．論文標題 TRUST WITHIN A COMMUNITY IS A DOUBLE-EDGED SWORD: TRUST HAS A POSITIVE INDIVIDUAL-LEVEL EFFECT AND A NEGATIVE CONTEXTUAL EFFECT ON SUBJECTIVE WELL-BEING	５．発行年 2019年
３．雑誌名 PSYCHOLOGIA	６．最初と最後の頁 113～123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2117/psysoc.2019-B011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Uchida Yukiko、Takemura Kosuke、Fukushima Shintaro	４．巻 32
２．論文標題 How do socio-ecological factors shape culture? Understanding the process of micro?macro interactions	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Current Opinion in Psychology	６．最初と最後の頁 115～119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.copsyc.2019.06.033	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takahashi Yoshiaki、Fukushima Shintaro、Hagiwara Risa	４．巻 25
２．論文標題 Determinants of Happiness in Japan and the Netherlands: Macro and Micro Analysis and Comparison	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Asia-Pacific Review	６．最初と最後の頁 124～150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/13439006.2018.1484618	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sznycer Daniel、Xygalatas Dimitris、Alami Sarah、An Xiao-Fen、Ananyeva Kristina I.、Fukushima Shintaro、Hitokoto Hidefumi、Kharitonov Alexander N.、Koster Jeremy M.、Onyishi Charity N.、Onyishi Ike E.、Romero Pedro P.、Takemura Kosuke、Zhuang Jin-Ying、Cosmides Leda、Tooby John	4．巻 115
2．論文標題 Invariances in the architecture of pride across small-scale societies	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of the National Academy of Sciences	6．最初と最後の頁 8322～8327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1073/pnas.1808418115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Sznycer Daniel、Xygalatas Dimitris、Agey Elizabeth、Alami Sarah、An Xiao-Fen、Ananyeva Kristina I.、Atkinson Quentin D.、Broitman Bernardo R.、Conte Thomas J.、Flores Carola、Fukushima Shintaro、Hitokoto Hidefumi et al.	4．巻 115
2．論文標題 Cross-cultural invariances in the architecture of shame	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of the National Academy of Sciences	6．最初と最後の頁 9702～9707
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1073/pnas.1805016115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Uchida Yukiko、Takemura Kosuke、Fukushima Shintaro、Saizen Izuru、Kawamura Yuta、Hitokoto Hidefumi、Koizumi Naoko、Yoshikawa Sakiko	4．巻 116
2．論文標題 Farming cultivates a community-level shared culture through collective activities: Examining contextual effects with multilevel analyses.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of Personality and Social Psychology	6．最初と最後の頁 1～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1037/pspa0000138	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福島慎太郎	4．巻 39(5)
2．論文標題 人のつながりと幸福感	5．発行年 2021年
3．雑誌名 精神科	6．最初と最後の頁 538～55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 福島慎太郎・竹村幸祐・内田由紀子・河村悠太
2．発表標題 信頼は集団レベルで規範に変化する―地域コミュニティ調査データに対するマルチレベル分析―
3．学会等名 日本社会心理学会 第62回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 福島慎太郎
2．発表標題 文化的幸福感―多層的な人間関係の効果に着目して―
3．学会等名 日本心理学会 第85回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 Shintaro Fukushima, Kosuke Takemura, Yukiko Uchida, Satoshi Asano, & Noboru Okuda
2．発表標題 When Does Mutual Trust among Community Members Lower Their Happiness? Moderating Effect of Residential Mobility
3．学会等名 The 2020 Society for Personality and Social Psychology’s Annual Convention（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 福島 慎太郎・竹村幸祐・内田由紀子・ 淺野悟史・奥田昇
2．発表標題 信頼の二面性―集団レベルのコミュニティ信頼は幸福を低下させる―
3．学会等名 日本社会心理学会 第60回大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 福島慎太郎・石黒格
２．発表標題 社会的ネットワークと一般的信頼との関連―ネットワークの密度・中心性・類似性に着目して―
３．学会等名 第92回 日本社会学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹村幸祐・福島慎太郎・内田由紀子
２．発表標題 協力規範と協力行動の関係を弱める住居流動性―自己の流動性 vs. 他者の流動性―
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yukiko Uchida, Kosuke Takemura, & Shintaro Fukushima
２．発表標題 Farming Cultivates a Community-Level Shared Culture through Collective Activities
３．学会等名 31st Annual Convention by Association for Psychological Science（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shintaro Fukushima
２．発表標題 Trade-off Relationship between Individual Happiness and Community Happiness
３．学会等名 16th Annual Meeting of International Society for Quality of Life Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 福島慎太郎
２．発表標題 安心から信頼が醸成されるのは高流動な個人？高流動な社会？―地域社会群データに対するマルチレベル分析―
３．学会等名 日本社会心理学会第59回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 福島慎太郎・石黒格
２．発表標題 社会の流動性に応じた人間関係の同質性・異質性
３．学会等名 第91回日本社会学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 福島慎太郎
２．発表標題 自他の幸福が両立した心理状態が促進される条件―ソーシャル・キャピタルの階層的な効果―
３．学会等名 日本心理学会第82回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹部成崇・福島慎太郎
２．発表標題 モラル・エレベーション喚起を調整する要因の文化差
３．学会等名 日本社会心理学会第59回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹村幸佑・福島慎太郎・内田由紀子
２．発表標題 自分と他者の住居流動性はどちらが問題か？―協力規範と協力行動の関係を弱める干渉効果―
３．学会等名 日本社会心理学会第59回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 福島慎太郎・内田由紀子・竹村幸祐	４．発行年 2020年
２．出版社 京都大学出版会	５．総ページ数 16
３．書名 信頼関係がつむぐ主観的幸福感―野洲川流域アンケート調査に対するマルチレベル分析	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京女子大学 現代教養学部 研究者データベース https://kenkyu-db.twcu.ac.jp/Profiles/3/0000255/profile.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関